

# 万葉図書・情報室だより45号

## 『万葉集』の稲作

稲は古代から人々の暮らしに欠かせないものです。『日本書紀』に天孫降臨に際して天照大神が高天原にある斎庭の稲穂を授けたとあるように、とくに稲は神聖視されていることがわかります。『万葉集』にも田を詠んだ歌がいくつかみられますが、なかでも稲作のサイクルにそった様々な場面が表現の対象となっている点が面白く感じられます。しかも、すべて恋歌です。そこで今回はそれらの歌々をご紹介しますと思います。

### ◆田植え

青柳の枝きり下し 斎種蒔きゆゆしき 君に恋ひ渡るかも  
(巻十五・三六〇三)

「青柳の枝をきり下して田に刺し、忌み清めた種を蒔くように、忌みかしこむべきあなたに、恋つづけることよ。」

柳は生命力の旺盛な植物で、刺した枝が根を下ろすか否かで吉凶を占う習俗が古代にはありました。この歌もそれを表しており、柳の枝を用いて田植えの祭りが厳かに執り行われてい

たと考えられます。  
衣手に水漬つくまで植ゑし田を引板わが延へ守れる苦し  
(巻八・一六三四)

「衣の袖に水あかが着くまで苦勞して植えた田を、侵入者を防ぐ引板をめぐらして守るのは、つらいことです。」

衣服を水田で濡らしながら苗代を植える苦勞が詠まれています。古代には田植えを必要としない直播もなされており、「住吉の岸を田に墾り蒔きし稲」(巻十一・二二四四)とあることからそれがわかります。「引板」は鳥獣の被害から稲を守るための設備で、縄に鳴子状の板をたくさん付けたものと考えられています。

### ◆実り

秋の田の穂向見がてりわが背子がふさ手折りける女郎花かも  
(巻十七・三九四三)

「秋の田のみのり具合を見廻りながら、あなたがどっさり手折って来られた女郎花よ。」

大伴家持が越中国(現在の富山県)の国守在任中に詠んだ歌です。国司のおもな仕事のひとつに租税の安定的な徴収があります。そのため家持は越

中国内を巡察して稲の実り具合をチェックしたものと思われる。ちなみに『日本書紀』は天孫降臨の地に「葦原千五百秋瑞穂国」と称しており、実り豊かな国土を象徴しています。『万葉集』にはほかに、稲穂がなびいて同じ方向に寄せられる「秋の田の穂向の寄れるかた寄りに」(巻二・一一四、巻十一・二二四七)や、稲穂が豊かに実った状態をいう「秋田の穂立繁くし」(巻八・一五六七)といった表現もみられます。

### ◆稲刈り

秋の田の穂田の刈ばかか寄り合はばそこもか人の吾を言なさむ  
(巻四・五一二)

「秋の田の稲穂の田の刈り時のように、こんなに寄りあつたら、そのことでも人は噂をたてるでしようか。」

いよいよ稲穂の収穫です。当然、コンバインのない時代ですから、すべて手作業です。今も家族だけでは手が足りず近隣住民らで協力することがありますね。古代の人々もそうであったことが、右の歌からわかります。

稲刈りの時期には田の近くに仮設の小屋を建てて、寝泊りをします。この小屋を『万葉集』では「秋田刈る仮廬」(巻八・一五五六、巻十一・二一七四)と詠んでいます。小倉百人一首の天智天皇御製歌「秋の田のかりほの庵のとまをあらみ」も同様です。

◆収穫後  
わが業れる早稲田の穂立ち造りたる 縷そ見つつ思はせわが背  
(巻八・一六二四)

「私の仕事とする早稲田の、穂立ちで作った縷ですよ。いつも見て私をおしのび下さい。あなた。」

刈られたのちは「稲を倉に荦蔵げて」(巻十六・三八四八)と詠まれているように高床式倉庫に貯蓄されます。ただ、いち早く生育する早稲は特別で、その生命力にあやかろうと縷(髪(髪)の裝飾物)になされることもあつたようです。

(主任研究員 小倉久美子)



## 利用案内

開館時間 午前10時～午後5時半  
休館日 1月曜日(祝日の場合は翌日)・年末年始・展示替日

図書室のご利用は無料です。  
閲覧でのご利用になります。

コピーサービス 白 黒一枚 10円  
カラー一枚 50円

奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室  
奈良県高市郡明日香村飛鳥一〇  
0744-54-1850(代)